

ダラスから見た大統領選挙

トランプを選ばなかったアメリカ

もつれた開票の経過は、都市と地方の格差を浮き彫りにした。

「サンベルト」と呼ばれる南部諸州は国際主義に対応、

グローバル・バリエーションにより雇用を増大させている。

新たなアメリカの「統合」はここから始められるだろう。

「ダラスに来れば自分の党の大統領に文句を言っている人に会えますよ」。筆者は、「南部のダラスはトランプ大統領をどう見ているか」と聞かれるたびに、こう答えてきた。

テキサスをはじめとする南部諸州は共和党の地盤である。ところが、NAFTA(現USMCA)物流の「扇の要」であるダラスや、ヒューストン、アトランタといった南部の大都市を中心に、ビジネス・リパブリカンと呼ばれる伝統的な共和党支持者の間で、トランプ政権の保護主義的な貿易政策や移民規制の強化といった「反国際主義」への不満が選挙前から高まっていた。今回の選挙でトランプ氏は、テキサス州では辛うじて勝利を収めたが、ジョージア州では共和党候補としては一九九二年以来の敗北を喫した。

今年の大統領選の展開を見ていると、「バイデン氏を選

サザンメソジスト大学(SMU) 准教授

武内宏樹

たけうち ひろぎ 一九七三年生まれ。慶應義塾大学卒、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)博士課程修了、博士(政治学)。SMUタワーセンター公共政策・国際情勢研究所サン・アンド・スター日本・東アジアプログラム部長を兼務。著書にTax Reform in Rural China: Revenue, Resistance, and Authoritarian Rule 等。

んだ」というよりも「トランプ氏を選ばなかった」と言っただけが正しいのではないかと思われる。民主党予備選の折、中山俊宏氏が「『ほかに誰もいない』感がこれほど強いトランプナーも珍しい」(三月三〇日付「日本経済新聞」)と評していたが、コロナ禍への対応をはじめとするトランプ政権のデータラメな政権運営や、トランプ氏の荒唐無稽なデマ交じりの暴言に嫌気がさした有権者が、バイデン氏を大統領に押し上げたといえるのではなからうか。

この三〇年、世界を取り巻く経済環境は激変した。その間、「サンベルト」(Sun Belt)とよばれる南部諸州では、日系を含む外資系企業の海外直接投資を誘致し、自由貿易と移民の増加という「国際主義」によって雇用を大きく増やしてきた。グローバル・バリエーションと称される、

国境をまたぐ工程間分業に基づく産业内貿易の恩恵も、それがNAFTAのような自由貿易協定がもたらしたものであることも、サンベルトの労働者は容易に実感できる。

一方、「ラストベルト」(Rust Belt)とよばれる中西部諸州には、かつては雇用を生んでいた有力企業の工場が閉鎖に追い込まれたことで暮らしの水準が落ちてしまった、日本流に言うところの企業城下町のような街が数多く存在する。ラストベルトの労働者がサンベルトに移れば問題は解決するのかもしれないが、南部への根強い偏見もあり、失業した労働者は地元での雇用機会を求める。米国製造業の雇用がこの三〇年間減ってきた原因はオートメーションであつてグローバル化ではないのであるが、「昔あつた雇用がなくなった」という不満を持つ白人労働者は「貿易と移民が仕事を奪つた」という結論に容易に飛びついてしまう。社会保障制度の整備によるセーフティネットの再構築が急務なのは明らかなのに、国民皆保険の導入もままならない。グローバル化がスケープゴートにならないよう祈りたいが、見通しは暗い。

そんな中で、サンベルトのジョージアでバイデン氏が勝利を収めたのは特筆に値する。また、テキサスにおいて六ポイント差まで迫つたのであるが、バイデン氏が南部に

ゆかりのない民主党候補だったことを考えれば健闘したと言つていいだろう。郡 (county) 単位の集計を見ると、多くの郡でどちらかの候補者が六〇〜九〇%を占めていて、両氏が拮抗している郡は非常に少ない。ダラスやヒューストンはグローバル化を体現する都市であるが、テキサスの大都市の周辺部には広大な農村地帯が広がっていて、そこはまさに「トランプ的な世界」である。今回「トランプ氏を選ばなかった」のは都市部の有権者であり、さらにトランプ氏がジョージアで敗れ、テキサスで苦戦した背景には、グローバル化の流れに乗ってサンベルトの都市化が急速に進んできたという事実がある。

制度化された人種差別が存在し、「反国際主義」の牙城として悪名を馳せてきた南部は一九六〇年代までの姿である。今や半世紀を経て、「国際主義」で米国経済を牽引し、「トランプ的な世界」と対峙しているのを見るのは隔世の感がある。バイデン氏は一月七日に行われた勝利演説で「UNITED States of America」と訴えた。南部は、自由貿易、移民受け入れ、人種の多様性によつて躍進してきた。まさにこの「国際主義」こそが、トランプ政権の四年間で極度に悪化した分断の傷を癒やし、米国民を世界に開かれた形で団結 (UNITE) させることになる。●